

本の ひろば

[月刊] キリスト教書評誌

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2015年5月1日発行（毎月一回発行）第688号

ISSN 0286-7001

出会い・本・人

寄留者として読んだカルヴァン 三好 明

本・批評と紹介

小島誠志 著

虹の約束 広田叔弘

黒川知文 著

日本史におけるキリスト教宣教 中村 敏

平山正実 著

死と向き合って生きる 柏木哲夫

田中利光 著

ユダヤ慈善研究 中村信博

徳永 徹 著

逆境の恩寵 斎藤正彦

秋山憲兄 編

高倉徳太郎日記 雨宮栄一

山北宣久 著

天笑人語 木下宣世

アンシア・ダブ 著／金成彰子 訳

心打たれて生きる 112の物語 廣戸直江

ウィリアム・クロケット 著／竹内謙太郎 監修／後藤 務 訳

ユーカリスト 越川弘英

金坂清則 著

イザベラ・バードと日本の旅 諫山禎一郎

近刊情報

書店案内



5
MAY
2015

日本の伝道を考える1

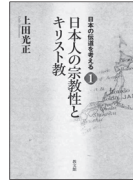
日本人の宗教性とキリスト教

上田光正

● A5判・208頁・本体1,500円

いまこそ教会の将来を考えよう！

百年後を見据えた日本伝道論全3巻。第1巻では、福音伝道をめぐる現代日本の宗教的状况を考察する。



続刊の予定

2 和解の福音

● A5判・208頁・本体1,500円

3 伝道する教会の形成

● A5判・288頁・本体1,900円

好評発売中

近藤勝彦

● 四六判・266頁・本体2,000円

『伝道する教会の形成——なぜ、何を、いかに伝道するか』

コンパクト聖書注解 ヤコブの手紙

E・デ・フリース 登家勝也／西田隆義訳



パレスチナ以外の地にあるキリスト者に宛てたヤコブの手紙。人間の行為の重要性を説き、様々な勧告によって構成されるこの手紙が示す信仰の核心を明らかにする。

● 四六判・192頁・本体2,400円

イエスとの実存的出会い

若者に寄り添いながら、信仰の本質を誠実に問い直した論文8編を収録。世界の混沌と社会の虚無に立ち向かう現代人に贈る人生の道しるべ。

● 四六判・228頁・本体1,600円



ギリシア語新約聖書釈義事典

説教、聖書研究の準備に！

〔全巻セット縮刷版〕

H・バルツ／G・シユナイダー編

荒井献／H・J・マルクス監修

新約聖書本文に現れる全ギリシア語語彙の文脈的・歴史的・神学的意味を解き明かす比類ない事典。教職者・神学生必携のロングセラーを小型化・軽量化し、価格も半額に！

● A5判・上製・3巻セット函入、本体63,000円
第I巻544頁、第II巻644頁、第III巻600頁



500部限定

4月の新刊 (価格表示は税抜)

shop

教文館

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1 TEL03-3561-5549

本のご注文は(e-shop 教文館)へ! <http://shop-kyobunkwan.com/>

shop 教文館



出会い・本・人

寄留者として読んだカルヴァン——三好 明

所属教派の神学校を卒業して九州の福岡における七年間の伝道・牧会の後、私は一九九六年の秋から韓国の神学校で学ぶ機会を与えられた。三十五歳のときのことである。その神学校は超教派の学校で、韓国語で学ぶ学部と大学院の他に、英語で学ぶことのできるプログラムがあった。私はたくさんの韓国人の学生たちやアジア・アフリカの諸国から来た約四十名の留学生たちと寮生活を共にしながら、祈りと学びの日々を過ごした。

その神学校にカルヴァンの『キリスト教綱要』の講義があった。韓国語訳『キリスト教綱要』の訳者である韓哲河^{キムテハク}先生の指導のもとで、バトルズの英訳によって第三篇第六章以下のキリスト者の生活についての箇所を読んだ。以前から日本語訳で読んでいた書物ではあったが、異国の地で寄留者として読むカルヴァンはそれまでとは違う響きをもって語りかけてきた。とりわけ、七章一の「我々是我々のものでない」で始まる一連の言葉が強く私に迫ってきた。その結びの部分でカルヴァンは、ガラテヤ書二章二〇節に基づき、人間の理性は聖霊に服従しなければならず、その人自身が生きるのではなく、その人の内でキリストが生きて治められるということを述べていた。(But the Christian philosophy bids reason give way to, submit and subject itself to, the Holy Spirit

so that the man himself may no longer live but hear Christ living and reigning within him [Gal. 2:20].) この時、自己否定という教えがそれまでになかったアリエーをもつて私に迫ってきたのである。共に学ぶ留学生たちの多くは、それぞれの国に帰ったならば貧しさや迫害の中でキリストを証しする務めをなすことになる。「あなたはどのようななかたで聖霊に従ってキリストを証しする務めをなすのか」と私はカルヴァンを通して問いかけられた。

約二年間の韓国での学びを終えて、私は一九九八年の秋に帰国し、十名前後の会衆が幼稚園の園舎で礼拝をささげていた志木北伝道所という群れの牧師となった。当時その群れは土地も建物も所有しておらず、二〇〇一年には礼拝の会場であった幼稚園も閉園となった。しかし、主の恵みの中で、幼稚園敷地の一部を購入して教会堂を建築し献堂をすることができた。それから十数年の年月が過ぎ、伝道者としてさまざまな経験を与えられてきたが、韓国で寄留者として受け止めたカルヴァンのメッセージは、今日まで変わることなく私の心の中にある。

(みよし・あきら 日本キリスト教会志木北伝道所牧師、日本キリスト教会神学校旧約学主任講師)

神の痛みに裏付けられた十字架の福音
小島誠志著

虹の約束
小島誠志説教集



広田叔弘

本書は四部構成になっています。第一部は創世記。一章から一章までの原初の物語を説き明かしています。第二部はヨハネによる福音書。第三部はコリントの信徒への手紙一と二。そして最後の第四部はクリスマス、イースター、ペンテコステ、それぞれの礼拝で語られた説教が収められています。

私は目次を見たときに驚きました。創世記、ヨハネによる福音書、コリントの信徒への手紙一、二。これらはいずれも、説教をする者にとって魅力的であり、同時に、容易には近づきにくいものではないのです。登山にたとえれば、剣岳というところでしょうか。魅力的で危険なのです。創世記には墮罪の記事が記されています。ここをどう説き明かすかで説教者の罪理解が分かります。ひいては、神と人間をどのように理解し、福音をどう信じているかが分かる。語ることによって自分自身が厳しく試されるのです。ヨハネに至っては、地べたに額をこすりつけるようにして悔い改めなければ、何ひとつ語ってはくれません。ヨハネのメッセージを現代の言葉にすることは、とても難しいのです。「あとがき」には次のように書いてあります。

「本書は、三一年間（一九八一年四月～二〇一二年三月）牧会させていただいた松山番町教会での終わりの数年に語った説教を集めたものです」（二五三頁）。

伝道者は福音を語ることによって生きたる者です。それはただちに、心血を注いで教会を生かそうとする営みです。三一年をひとつの教会にささげて、その終わりの日々語られた説教。創世記、ヨハネ、コリントと続く意味が、分かる気がしました。この説教集は、ひとりの伝道者が生涯をかけて指し示した福音の証しです。これまでの信仰と奉仕が集約された渾身の一冊、と言えるものです。

創世記からエノクを説き明かして次のように語っています。

「彼が神と一緒に歩いたということによって、彼の人生に全部に意味が生まれるし、彼の人生すべてが意味あるものとして成り立つ。（中略）弱い人間が神と共に歩いて、神と一緒に歩いたところに、彼の道ができる」（九一～九二頁）。

著者は人間を評価しません。神と共に歩むところに、人間の生きる意味が生まれると言います。このように深い人間理解を

持つ著者は、罪に対しては厳しい姿勢を持っています。本書の表題になっている「虹の約束」の中で次のように語ります。

「すべての罪は密かに行われるのですが、人間の罪の中で、無害な罪というのはいりません。だれにも迷惑をかけない、だれも傷つけない罪なんて一つもありません。罪は必ずどこかで人を傷つけることになり、そして、どこかで人の血を流すという形で現れる」（二一九頁）。

人間の現実です。そしてこのような私たちに對する救いが、主キリストの十字架の死です。

「そこには、神の痛みがある。神の恵みの背後には、神が私たちのために苦しみを担ってくださったということがあるのです。それが、神の恵みだということを、私たちは信じているのです」（二二三～二四頁）。

人間の苦悩の原因を罪に認め、そこからの救いをキリストの贖罪に置きます。そして御子の十字架の死を支えるものは、神

の痛みであると言う。ここに、著者の明確な福音理解があると見えるでしょう。私たちはキリストの血によって罪を赦され、神の愛に出会うのです。それは、痛みを負って人を愛する神と出会うということです。ヨハネが愛を語り、パウロが義を語るように、著者は神の痛みに裏付けられた十字架の福音を語り続けます。

巻頭の扉にはオリブのイラストがあります。ノアが放った鳩を連想させます。著者は希望を抱いている。主キリストによって、人ひとりが救われる恵みを願っている。そのためにこそ、説教集『虹の約束』は世に送り出されるのでしょうか。

（ひろた・よしひろ 日本基督教団梅ヶ丘教会牧師）
（B6判・二五六頁・本体一九〇〇円＋税・教文館）

旧約聖書神学用語辞典

響き合う信仰

教師、教会必携！

W・ブルツゲマン 小友聡／左近豊 監訳



旧約神学の最も重要な105項目を、北米を代表する旧約学者が解説。項目が互いに響き合う、旧約神学を読む辞典。
A5判 上製・530頁・6696円



本書を推薦します 並木浩一
国際基督教大学名誉教授
元旧約学会会長

教会、信徒は自死といかに向き合うか

自死遺族支援と自殺予防

平山正実／斎藤友紀雄 監修
遺族、自殺未遂体験者の手記、支援者や専門家からの提言を収録。「自死」を通して生きることをあらためて考える。
四六判 並製・240頁・1,944円

長崎の被爆者救護に励んだ放射線医

ひかりをかかげて《第6回配本》
永井隆 原爆の荒野から世界に「平和を」
片山はるひ
A5判 並製・130頁・1,296円

キリスト教死者儀礼の意味するものとは

天国での再会
日本におけるキリスト教葬儀式文のインカルチュレーション
中道基夫
A5判 上製・266頁・3,888円

日本キリスト教団出版局
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457
E-mail eigyou@bp.uccj.or.jp 《価格8%税込》
http://bp-uccj.jp

歴史的考察を通しての意欲的な日本宣教論
黒川知文著

日本史におけるキリスト教宣教 宣教活動と人物を中心に



中村 敏

本書の執筆者は、ロシア史やユダヤ史が専門の研究者であり、そうした分野の著作も多い。著者は本書の「あとがき」で、日本史に関しては「しろうと」を自認しているが、「しろうと」の思いつきは、普通、専門家のそれにくらべて優るとも劣らぬことが多い」とのマックス・ヴェーバーの言葉を引用し、本書の執筆に並々ならぬ情熱と意欲を吐露している。

この言葉に示されているように、本書は従来の日本キリスト教史に関する諸著作とはかなり傾向や着眼点が異なり、余りそれまでの研究の常識にとらわれていない。そこに本書出版の意義があると見えよう。

以下でできるだけ内容に即して本書の特色を論じていきたい。まず「序章——問題提起」では、日本にキリスト教が伝えられるから四五六年たちながら、キリスト教人口が〇・八二七%の厳しい現実を指摘している。しかし著者は、宗教団体のイメージに関するアンケートや日本史における指導的人物とキリスト教の関わりについて積極的に評価し、「確かに困難であるが、希望があり」、必要なことはわかりやすく大胆に積極的に福音

を提示することであると論じている。そうした期待を前提に、著者によれば本書は三つの視点から叙述されている。

①本書は通常の意味での日本キリスト教史の通史ではなく、福音が宣教されている活動に焦点を合わせている。

②「歴史を動かす力は民衆である」との立場に立ち、指導的人物だけではなく民衆に視座を設定して叙述している。

③これも従来の類書に無い構成であるが、カトリック、プロテスタント、東方正教会の壁を越えて、特に成果があったと思われる活動と人物を取り上げている。従来はプロテスタントやカトリックの研究者が執筆すれば、自分たち中心の叙述に偏りがちであった。本書では従来影の薄かった東方正教会の宣教の記述についても、ニコライを中心にしつかりとまとめられている。

次に読者の立場から見ると、評価できる点をあげてみたい。①各章ごとに結論をわかりやすくまとめている。特に明治期は諸教会による活発な宣教活動がよくまとめられている。

②大正期においては、無教会運動、救世軍の活動、そして再

臨運動に光をあて、意欲的に描いている。特に内村の戦争観についての記述は読みごたえがある。

③従来の二次的参考文献にあまりとらわれずに、できるだけ同時代の雑誌、新聞等の一次資料を駆使して、生き生きと描き出している。特に内村鑑三の活動や「神の国運動」について詳しく紹介している。

④表や地図や写真を多用し、宣教活動について視覚的に説得力を持たせて描いている。

⑤「宣教にささげた人」というコラムで、一四人の人物を描き出している。カトリックから三人、東方正教会から一人、プロテスタントから一〇人で、最近の人物として西日本で活躍したR・カックス宣教師や現役の尾山令仁が紹介されているのが異色である。

終章でのまとめで、「①日本宣教には希望がある。②宣教の対象は全社会層に及んだ。③国家への皮相的な妥協があった。」

④教会の内部改革が必要である。」と結論付けている。そして最後にこれからの日本宣教の七つの鍵を提唱し、具体的な伝道方策を提言している。こう見て来ると、本書は日本キリスト教史の考察を通しての日本宣教論ということができよう。なお課題としては、日本のプロテスタント教会を「社会派、福音派、聖霊派」と三つに分けている(五頁)が、果たして妥当であろうか。また戦時下の教会の対応を「教会を存続させるための国家への一時的な皮相的妥協」(四三―四五頁)と評価するが、そう言い切れるであろうか。これは日本の教会の体質的な課題ではないだろうか。

なお訂正が必要なのは、「日本福音同盟」(一六二、二一八頁)は戦後誕生した団体の名称で、戦前は「福音同盟会」というのが正しい名称である。

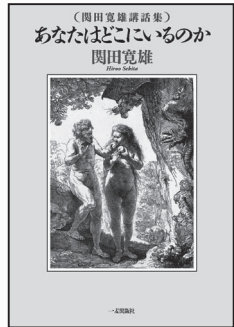
(なかむら・さとし)新潟聖書学院院長、聖書宣教会講師
(四六判・四七八頁・本体三〇〇〇円+税・教文館)



あなたはどこにいるのか

(関田寛雄講話集)

関田寛雄
Hiroo Sekita



苦学する青年たちに寄り添い、
その魂を揺さぶった言葉!

その言葉に、
困難や苦悩のなかで
生きる勇気を得た——

四六判
定価 [本体 2,200 + 税] 円
ISBN978-4-86325-076-5



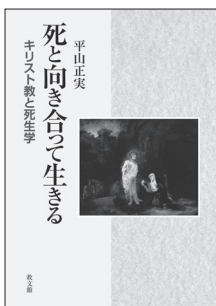
株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢 3 丁目 4-10
TEL (011) 578-5888
<http://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

実存を賭けた希望の死生学

平山正実著

死と向き合って生きる

キリスト教と死生学



柏木哲夫

平山正実先生の訃報に接したとき、私の心に最初に起こった気持ちには「よく頑張られたなあ」というものであった。病気がかなり進み、痩せも目立つようになられた頃、ある学会でお目にかかった。病状の悪化にもかかわらず、先生の「このころの力」は衰えていなかった。死生学に関する先生のお考えを熟っぽく語られた。

先生とは随分長いお付き合いであった。先生と私は多くの共通点がある。思いつくままあげてみると、

- ・年齢が近い（先生Ⅱ一九三八年生まれ、私Ⅱ一九三九年生まれ）
- ・医学を志した
- ・精神医学を専門にした
- ・途中で人間の死に関心を持つようになった
- ・キリスト者である
- ・大学で死生学講座をスタートさせた（先生は一九九三年、東洋英和女学院大学人間科学研究科で、私は同年大阪大学人間科学研究科で）

る。ホスピスでの死を看取る働きについて書いたものであるが、なぜ、「死を支える」ではないのであろうか。

確かに「死」を学問的に研究したり、考えたり、支えたりするときに、それは結局のところ、生を研究したり、生きることを考えたり、生を支えたりすることにつながる。それで、死だけではなく、生を死に寄り添わせてセットにすることがなされるのかもしれない。

平山先生は本書の中で、このあたりのことに関する先生のお考えを述べておられる。それは「死生学」から「生死学」への提唱である（一八三頁以下）。先生はご自身の思索、苦闘、葛藤の結果として、死生学というよりも、生死学と呼ぶべきではないかとの提唱をしておられる。本書を通読して、死生学が自分の死を自覚し、死に直面して生を学ぶ学問であれば、生死学は生の中で死を学ぶことであり、私たちは今後この方向を目指すべきではないかと提案されているように感じた。将来彼の地で先生にお会いしたら、是非この点を確かめたいと思っている。先生は言葉が大切にされる方であった。本書のあちこちにキラッと光る言葉がちりばめられている。それらのうちいくつかを取り上げてみたい。

・「未完の完」

人生を未完成のまま受け入れることができる人は神に委ねることができると、祈りの心を持っている人であると思う。終末の床にあつて完成できないことを悔いる必要はない。たとえ未

この度、平山先生が生前にご自分で企画・編集された最後の本が出版された。本書には、先生が「死生学」にまつわるいくつかのテーマで執筆してこられた論文やエッセイと、先生が病床にまで原稿用紙を持ち込んで執筆しておられた未発表の遺稿「キリスト教と死生学——未完の完」が収録されている。

先生はこれまで多くの死生学に関する著書を上梓してこられたが、本書はその集大成と言えるであろう。本書の副題に「キリスト教と死生学」とある。「死生学」という言葉は英語の「Thanatology」を訳したものであろう。三省堂の『新コンサイス英和辞典』でその言葉を引くと、「死亡学、死」心理研究」とある。Thanatologyはギリシャ語の「Thanatos、死」を語源とする。従つて忠実に訳すならば、「死学」となる。なぜ、「死生学」と「生」が入るのであろうか。

日本の各地に「生と死を考える会」という集まりがあり、「死」について学び、考える会で、定期的に活動している。なぜ、「死を考える会」ではないのであろうか。拙著に『生と死を支える』（朝日選書三四一、朝日新聞社、一九八七年）があ

完成のままであつても、神に与えられた使命を精一杯果たそうと努力したのであれば、その人の人生は「未完の完」と言えるのではないだろうか。

・「スピリチュアリティ（霊性）の覚醒」

もし、後生の人々に残る精神的な遺産が死生学にあるとすれば、心の奥底に眠っている完成やスピリチュアリティ（霊性）が覚醒するきっかけとは何かを明らかにすることであると思うようになった。

・「存在の根拠へのまなざし」

人間は死が迫ったときにこそ、健康な時に頼っていたものは異なる、根源的な拠りどころ、つまり存在の根拠へのまなざしが開かれるのであろう。

この世に生を受けた者はだれ一人の例外なく死を迎える。サマセット・モームの言葉であるが「人間の死亡率は一〇〇％である」。人間の生と死、とりわけ死に関心を持つておられる方々に本書を推薦したい。きっと新しい気づきが本書を通して得られると確信している。

（かしわぎ・てつお 澁川キリスト教病院理事長）

（四六判・二二二頁・本体一五〇〇円＋税・教文館）

福祉と信仰の架橋として
田中利光著

ユダヤ慈善研究



中村信博

本書は社会福祉学の博士論文（首都大学東京）にもとづいて
いる。ただそれを知らなければ、むしろ古代ユダヤ社会史か思
想史の研究書かと錯覚してしまうかもしれない。それほどに、
本書は社会福祉の思想的源流を古代ユダヤにこだわって論じて
いる。その構想は、大胆で意表をついている。事実、この視点
からの先行研究は稀少である。だが、欧米における福祉思想の
中心となる「施し」は、古代ユダヤで形成された「慈善」を
足がかりにして成立したものであった。本書によって、この図
式が了解されれば、福祉学本来の地平にあえて留まって、骨太
に論じようとする著者の意図も酌み取ることができよう。

ここで本書を借りて、「施し」（第二章）の起源について、若
干の確認をしておきたい。本来、古代ユダヤにおける「慈善」
の思想は、社会正義の応用として発展を遂げたものであった。
ヘブライ語のツエダカーは「義、正義、慈悲、慈善、施し」な
ど多様な意味を有する。トラーの「施し」は、生活困窮者に
対する隣人愛の要請であったが、ミシユナ、タルムードに至っ
て、「義」は神の属性とされ、「施し」はその表明手段とされた。

としての性格をもつ。ここでは、「義」と「施し」との関係が、
思想的・教義的背景と実践的な規定・制度の関係によって明ら
かにされている。著者の宗教規定への関心はさらに「古代ユダ
ヤ社会における病者と障害者」（第四章）へと引き継がれ、罪
概念と病者、また障害者がどのような位置関係にあり、どのよ
うに処遇されたのかが論じられている。

最後の二章は、ユダヤ教とキリスト教における女性の活動を
扱っている。「古代シナゴグにおける女性指導者」（第五章）
では、ユダヤ教指導者としての女性が確認されると報告されて
いるが、「女性ディアコノスと女性の礼拝」（第六章）では、キ
リスト教では同様の活躍が確認できないことが報告されている。
しかし、「静」に象徴される礼拝と女性観が支配するなかにあ
って、むしろ、「施し」の担い手としての女性の役割は期待さ
れていた。近代の市民社会において、医療・福祉事業と教会と
を繋いだのはこの女性たちであった。補遺として編まれた「落

いっぽう、七十人訳は、古典ギリシア語には見られなかったエ
レモスナー（施し）を訳語に採用し、「義」＝「施し」の理
解を強化する結果となった。この言語感覚を受け容れたキリス
ト教においては、やがて「施し」こそが「慈善」の中核と位
置づけられるようになったのである。すなわち、「施し」とい
う営為は、ユダヤ的な「義」を根拠としたものから、「愛」に
由来するキリスト教独自の「慈善」へと変容したと考えられる。
本書は、こうした概念変化の起点を「ユダヤ慈善」と定義する
ことで、福祉思想の出発点を探求しようとした試みである。

前後するが、本書の構成を略述したい。まず、「序」と「研
究序説」（第一章）においては、先行する研究が紹介され、ユ
ダヤ教が古代から近現代まで概観されている。「ユダヤ慈善に
おける『施し』とその用語」（第二章）については前段で述べ
たが、関連する語義やその使用についても丁寧に分析されてい
る。つづいて、「初期ユダヤ教の貧困者救済制度」（第三章）に
ついて、タルムードの「ペアー篇」を中心に考察が加えられて
いる。「ペアー篇」は最低限の食生活を保障するための福祉法

ち穂拾いと福祉文化」は、ユダヤ的「施し」の伝統を継承した
フランス農村社会についての多角的な分析である。補遺とはい
え、福祉の社会的機能を古代ユダヤとの関係で歴史的な視点か
ら迫った貴重な論考である。

著者の壮大な構想が机上のものでないことは、牧師、社会福
祉施設職員、大学教員という経歴を拝見することで得心されよ
う。現場と理論の相互検証を課題とされた著者ゆえの大きな業
績といえるべきであろう。方法と手続も適切に説明され、論理
も明解で、関連諸分野の初学者から専門家に至るまで、広く歓
迎されるべき好著である。「ユダヤ慈善」によって、福祉と信
仰とが架橋され、あるべき福祉社会を見据えて本格的な議論が
起こることを著者とともに期待したい。

（なかむら・のぶひろ 同志社女子大学教授）
（A5判・三五六頁・本体四六〇〇円＋税・教文館）

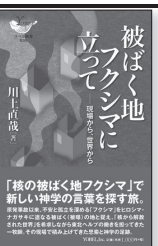
東北ヘルプ事務局長

川上直哉著

「核の被ばく地フクシマ」で新しい神学の言葉を探す旅

被ばく地フクシマに立って

現場から、世界から



「核の被ばく地フクシマ」で新しい神学の言葉を探す旅。
原発事故以来、不安と孤立を深める「フクシマ」をヒロシマ・
ナガサキに連なる被ばく地と捉え、「核から解放された世
界」を希求しながら、東北ヘルプの動きを担ってきた「牧師」
その現場で積み上げてきた思索と神学の足跡。
●ヨベル新書030二七六頁、一、〇〇〇円＋税

好評既刊の本

宗藤尚三著 ヨベル新書 022

核時代における人間の責任

ヒロシマとアウシュビッツを心に刻むために
川上直哉師・評 学ぶこと多く、読後の印象は深い。「政治においては服従は支持と同じである」という宗藤さんの言葉は、今、厳しく響く。心して読み、深く沈黙を促される書物である。再版 ●新書判・176頁・1,000円＋税

A. グリューン著 村椿・松田訳

私は戦争のない世界を望む

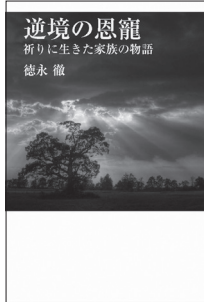
岩本達徳師・評 人を戦争に駆り立てる心理を形成する年少期の体験や親による支配、成功神話や支配欲などについてはの洞察を深め、それらを克服する力は「共感すること」〈平和への夢を持ち続けること〉だと説く。推薦いたします。 ●変型46判・900円＋税

株式会社ヨベル YOBEL Inc.
info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
*自費出版の専門出版社*資料・星

時代を越えて読者を鼓舞する

徳永 徹著

逆境の恩寵 祈りに生きた家族の物語



齋藤正彦

私はは逆境に置かれた時、全能にして恵み深い神の恩寵を信じられなくなる。しかし私共に代って、「神に見捨てられた」逆境の苦難をそのきわみまで受けて十字架に死なれた主の恵みによって、はじめてすべての逆境は恩寵に変えられる。「逆境の恩寵」こそ、キリスト教信仰の神髄であると言つて過言ではない。

「逆境の恩寵」の著者、徳永規矩は一八六一年（文久元年）熊本県水俣の名家に生まれた。徳富蘇峰、蘆花はその従兄弟に当たる。時代の転換期に生きる若者の常として幼い時から功名心に燃えて、熊本洋学校に入学し、キャプテン・ジェーンズの下で学び、さらに志を立てて上京、慶応義塾に入学。明治十年西南戦争勃発の年である。さらに宣教師ジョン・バラが横浜に英語塾を開いたことを聞いて、英語を学ぶために入学、最初はそこで教えられるキリスト教に強く反撥したが、次第に感化されて本気で聖書を学ぶようになり、明治十二年に横浜住吉町教会で受洗。恩師、親族の反対にもかかわらず、生涯その信仰を貫いた。入信した年に帰郷した規矩は同志と共に熊本英学校を

底に働く神の恩寵を彼は次のように述べている。「ああ神の救いは至れり尽くせりである。私が肉眼では、希望のかけらさえ見えないような時にも、神はなお、測り知れない幾多の方法を持っておられて、常に私たちを万難の中から救い出して下さる。『神は真実な方であり、あなたがたを耐えられるような試練に遭わせることはなさらず、逃れる道を備えていて下さいます。』（第一コリント一〇・一二）」

やがて規矩は、自分が置かれた逆境の中で与えられた、この大いなる恩寵の体験を、自分同様に様々の逆境に苦しむ幾千万の同胞と頷き合い励まし合いたいとの切なる願いをもつて、発病から死去までの十五年にわたる長い闘病生活の中で与えられた、数々の恩寵体験を、病床に仰向けに伏したままの姿勢で書きつづけた。この手記が矩規の死の翌年明治三十七年に徳富蘆花の斡旋によって植村、内村、海老名らが序文を書いて警醒社から出版された。出版直後から爆発的な売行きを見せ、文語体の原著は少なくとも計27版を重ねた。このことは維新以来、ひたすら文明の繁栄を求めた時代の蔭で、いかに多くの民が逆境の中で真の救いを求めて苦しんでいたかを物語っている。

しかし何といつても一世紀以上も過去の書である。時代背景も物の考え方も大きく変化し、今日では原著を知る者も読む者も少なくなっている。戦後口語訳が出版され、筆者もはじめて読んで感動したことを覚えていたが、それも半世紀近く前のことで、すでに絶版になっている。しかし時代は変つても、医療

経営、政界・財界にも身を投じ、全力を傾けて働きつづけていた。その矢先、一八八八年二月一九日の雪の降る夕べ、教会からの帰りに突然吐血、その後医師の診断によって結核と判明、以後十五年の闘病生活を送ることになる。その時の事を顧み、次のように罪を悔い改める祈りを捧げている。「ああ人は決して二人の主には仕えてはならない。私がキリスト教の信仰に入ってからすでに十数年になるのに、靈性の進歩は遅々として進まず、それどころか、信念を根こそぎ失う瀬戸ぎわにまで立ち至ったというのは、もともと茨の道と栄達の道とを併せ望んだためである。私は実に間違っていた。私は大きな罪を犯したのだ。私の病気のもととは実はここにあるのだ」と。この祈りを聴かれた主は「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」（マタイ11・28）と招かれ、逆境の重荷に疲れ果てて、犯した罪を素直にさげしめた規矩を、その恩寵の中に受け入れ、魂の安らぎを約束されたのである。悔改めこそ逆境と恩寵を結ぶ絆である。さらに闘病の中で貧困飢餓に加えて、暴風によって住む家も無くしたが、逆境のどん

や社会保障の整備によつても解決しない逆境の中で、真の救いを求める者は絶えない。そのような時代の要請に答えるべき著作が、このたび規矩の令孫、徳永徹氏によつて『逆境の恩寵——祈りに生きた家族の物語』と題して出版された。本書は原著の単なる再版ではなく、現代の読者の理解を助けるために時代背景や家族、交友関係の解説などを随所に加えて、原著の魅力を損なわないよう配慮して物語風に構成されている。原著を何とかして少しでも多くの現代人にも理解させたいとの著者の切なる願いから出たご苦勞を感謝したい。

本書は第一章「最後まで耐え忍ぶ人——徳永規矩」、第二章「愛によつて歩む人——徳永歌子」によつて構成されている。字数が尽きたので省略するが、逆境の規矩を支えた神の恩寵が、苦難を共にした妻や子どもたちまで及び、それぞれ牧師夫人やキリスト教幼児教育の先駆者として、あるいは福岡女学院の日本人初の院長として戦時下の当局の厳しい指導に抵抗してキリスト教主義の教育を守り通したり、恩寵に生かされた者にふさわしいキリスト者としての生涯を全うされたことを思い、感謝の念を新たにするものである。本書が少しでも多くの現代の逆境に苦しむ者に読まれて、言葉による慰めと希望と生くる力が与えられることを願つてやまない。

（さとうとう・まるとこ）元女子学院院長
（B6変形判・二二九頁・本体一八〇〇円＋税・新教出版社）

一人の伝道者の始めから終わりまでの日記
秋山憲兄編

高倉徳太郎日記



雨宮栄一

日記には二つの種類がある。一つは、永井荷風の「断腸亭日乗」がそうであるように、文学作品として後の人に読まれることを期待して書かれたものと、他の一つは、全く他者に読まれることなど考えもしないで書かれたものである。このたび刊行された「高倉徳太郎日記」は完全に後者に属する。人に見せるためでなく、あえて言うならば、牧師としての自分のために、志を高く掲げてその課題をどこまで果たしてきたかを自己検証するために、時には呻き、時には喜び、赤裸々に自己自身のことを書き綴った日記である。読む者の心を打つ。この牧師は生涯、主の召命に応答するために自己を捧げきった人である。

絶筆に当たるところは、一九三四年三月二十二日、
「春らしき光——これをうけたし——主の光をうけたし——
——今日の一日、頭が狂うことなからんことを願うなり——
——切に願うなり——」

とある。それから僅か二週間足らずのうちに高倉は自死した。当時彼が牧していた信濃町教会は牧師の自死をあえて公表しなかった。

この日記には、「はじめに」と題する現信濃町教会牧師笠原義久氏の短文、「解説に代えて」と題する元信濃町教会牧師池田伯氏の十二頁に及ぶ文章、そして南宮さんの「秋山編集長から託されて」、秋山真兄さんの「あとがき」が各々二頁置かれている。この日記を手にする読者は、これらの文章を先に読まれることをお奨めする。高倉徳太郎の死後八十年を経て、なぜ今日この人の日記が全文刊行されるに至ったのかがよく理解される。中でも池田伯牧師の「解説に代えて」は必読である。

高倉徳太郎牧師とは、合同教会である日本基督教団が成立する以前、教派教会である「日本基督教会」の牧師である。京都府綾部の出身であったが、明治三十九年（一九〇六）金沢の第四高等学校を卒業、東京帝大法学部に入學、富士見町教会で植村正久牧師に出会い決定的な影響を受ける。植村牧師から洗礼を受け、伝道者にならんとして東京神学社に学んだ。

日本基督教会牧師として按手札を受けたのが大正元年（一九一二）、次いで翌年一月京都吉田教会に赴任した。本書には、この時から主のみもとに召される時までの日記が収録されている。

る。いわば一人の伝道者の始めから終わりまでの日記と言いつてもよい。

この人は吉田教会から、遠く北海道札幌の北辰教会（明治四十二年）、次いで東京神学社で教鞭をとるために上京（大正七年）、病中の森明を助けるために中渋谷教会で説教を為し、鎌倉教会に奉仕し、イギリスに留学（大正十年）、神学の研鑽に励む。大正十三年帰国、大久保百人町の自宅で開拓伝道を開始、精魂を尽くして神の言葉を語り、戸山伝道教会を建設、翌大正十四年東京神学社校長になり伝道者の養成に努める。昭和二年富士見町教会より九十四名の転会者を迎え、信濃町教会となる。若き同志と呼びかけ、日本基督教会の神学的革新を願う『福音と現代』を定期刊行する。また東京神学社と明治学院神学部と合併し日本神学校が創られ、校長になる。この間、日本全国各地の教会を援助し、多くの神学著作を発表、日本の教会の革新に励んだ。

この牧師の生涯の戦いは、聖書に基礎を置く命をかけた福音的な説教であり、その神学の確立であり、ひいては神学教育の改革であり、更に日本基督教会の革新であった。この人にとって教会は「常に改革される教会」であった。この激戦と激務は、次第に健康であった高倉牧師の心と体を蝕む。そして自死に至ったのである。

本書には大正七年を除く全日記が収録され、この間の牧会、伝道、教育、神学形成に捧げられた日々を牧師本人がどのように感じ、考えていたか、読者は手に取るように読み取ることができる。

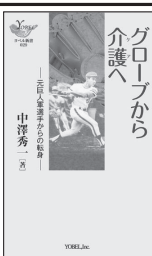
この日記は読む者にとって、自己のあり方への静かな、しかし激しい一つの問いになること必定である。牧師だけではない。信徒もまた問われていることに変わりがない。

（あめみや・えいいち 日本基督教団隠退教師）
（四六判・九一〇頁・本体五〇〇円＋税・新教出版社）

東京基督教大学教授 中澤秀一 著

* 待望の初著書！

グローブから
介護へ



グローブから 介護へ 元巨人選手からの転身

ユーモラス・有益・謙虚な告白 赤江弘之師（日本国体野球選手、元巨人選手、プロ野球選手になるまでの物語、プロ野球選手としての挫折、結婚と老人ホームの世界への転身、介護福祉士養成校教員への道、大学教授へのステップアップの苦闘の学び、どの項目もユーモラスで有益な文章が綴られて読者を魅了する。） ●ヨベル新書029・二二四頁・一、〇〇〇円＋税

大和昌平著（東京基督教大学教授）

追憶と名言による キリスト教入門

吉川直美師・評（シオンの福音教会牧師・聖契神学校教師）

…実に色とりどりのことばの横糸が織り込まれている。織りなす糸は一篇一篇違えども、最後には必ず創造主が、イエスがすくくと立ち現れてくる。…キリスト教は西欧の宗教だと思っている人にも、キリストに従おうと幼少期を切り捨てて来た人にも、幼子としてくぐるキリスト教への入り口として誇りを持って本書をお勧めしたい。（『本のひろば』評より）

●ヨベル新書 013・152頁・900円＋税

牧師の読み解く般若心経

新書版への改訂編集

大和昌平著 ● 近日発売予定

株式会社ヨベル YOBEL Inc.
info@yobel.co.jp

〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858

* 自費出版の専門出版社* 資料・星

笑いの中の真実を掘り起こす
山北宣久著

天笑人語



木下宣世

またまた山北宣久牧師のおもしろい本が出た。題名は「天笑人語」。どこかで聞いたような言葉だが、天笑はどうやら詩編二編四節「天を王座とする方は笑い」（新共同訳聖書）から来ているらしい。広い大きな心をもって人間社会の諸々の事柄をユーモアと笑いで包み込もうという算段か。そうするとそこから希望と勇気がわいてくるというわけである。

表紙の絵がまた良い。著者と思われる人物が落語家の衣裳を着てにこやかに座っている。手ぬぐいを膝に置き、扇子で頭をピシヤリと叩いている。羽織の紋所は十字架だ。そばで猫が笑っており、木の枝では鳥がさえずる。右上には雲の上で背中に羽根の生えた方がひっくり返って笑っているように見える。何とも長閑と言うか平和と言うか、温かな雰囲気である。表紙ばかりでなくこの長嶋洋一氏の挿し絵は本書全編にわたり各文章の冒頭に付されており、著者の文をもりたてている。

「あとがき」によると、この本は福音社の月刊誌「サインズ・オブ・ザ・タイムズ」に「笑いとエスプリ」という題で三年間ほど連載していたものを一冊にまとめたものという。全体はI

からIVに分けられ、各編は九つの文章から成っている。従って全部で三六のエッセイが載せられているというわけである。どの文章も笑いで満ちているが、もちろんただ読者を笑わせることが著者の目的でないことは言うまでもない。それでは本書を書いた著者の真意はどこにあるか。

著者は「『あなたの罪は赦された』との宣言、十字架と復活にこめられた福音の威力を知るゆえに、あらゆる暗さを貫いて笑いを発していくことが可能なのだということを知っているのがキリスト者の本領なのでしょう」と記している。そして「福音の豊かさの反響板、神の愛のビッグエコーとして」この本を発行したと述べている。神の救いの御業に対する動かぬ信頼の上に立つがゆえに、暗く困難な現実をもユーモアと笑いで乗り越えて行くことができる。それが著者のこの本を通して読者に伝えたかったメッセージではないかと思われる。

さて、中身に入るとそこはまさにヤマキタワールドである。ジョークや語呂あわせが満載だ。

どういうわけか著者の文章には三連語が多い。早くも第二話

「三み一体」からその連発である。「ねたみ、そねみ、ひがみ」「ゆるみ、りきみ、たるみ、いやみ」「恵み、憐れみ、慈しみ」「歩み」「すこみ」「極み」。これでもか、これでもかというほど出てくる。ここで余り多く紹介してしまうと肝心の本を読まなくなってしまうのではないかと心配は御無用。これはまだほんの始まりで、この語呂あわせはまだまだ最後の方まで行っても出てくるのである。よくぞこんなことが思い付くものとはと感心してしまふ。

また、著者の紹介する人物は多彩である。古今東西、有名な人もそうでない人も実にたくさんの人を知っておられる。

それだけではなく引用する文章もまた広汎多岐にわたる。聖書の言葉はもちろんであるが、ほとんど全編において引用文が記されている。ことわざ、詩、印象的なエピソード等々である。著者はこれらの文章をどのようにして手に入れたのか、不思議なほどである。

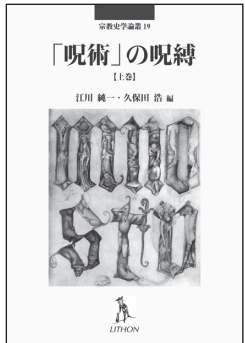
本書は表紙の絵のとおり、落語家が語るような語り口の文章になっている。それだけでなく落語のように話のマクラやオチがあるのである。特に「短足万歳」という文章のオチは筆者も短足のせいか見事という他ない。ぜひお読みいただきたい。かつてある教師から話し方の極意として、聴衆を笑わせておいて、次に大切なことをズバリと言うと、それは印象に残るということを聞いたことがある。

（きした・のぶよ）日本基督教団西千葉教会牧師

（四六判・二三六頁・本体二〇〇円＋税 日本キリスト教団出版局）



新刊



宗教学論叢19

「呪術」の呪縛
【上巻】

江川純一・久保田 浩 編
●A5判上製 本体5,000円＋税

江川・久保田「呪術」概念再考に向けて／藤原聖子アメリカ宗教学における「呪術」概念／横田理博ウェーバーのいう「エントツァウベルク」とは何か／木村敏明プロテスタント宣教師の見た「呪術」と現地社会／池澤 優中国における呪術に関する若干の考察／川瀬貴也近代朝鮮における「宗教」ならざるもの／堀江宗正サブカルチャーの魔術師たち／他8篇を収録。

ISBN978-4-86376-042-4

LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区三崎町2-9-5-402
FAX 03-3238-7638

日常の中で神を垣間見る案内書
アンシア・ダブ著
金成彰子訳

心打たれて生きる 112の物語



廣戸直江

「私は老人ですが、いまだに探求者であり、たくさんの疑問と驚きで一杯です。ある時は優しく、またある時は奮い立たせるように、様々な人たちの上に、そしてあらゆる状況の中で御業を行われる神の気配を察知する」と著者は書いています。この一二の物語の一つひとつは何気ない毎日の小さな出来事、出会いの中の働きです。そこでささやかれる聖霊の声と息吹を敏感に捉え、神に触れた作者の体験を読者に伝えてくれるのです。

たとえば、第41話では、作者が会合でステージの上に立つて集まった人々を見渡した時、不意に神の愛、神の王国の深さを見抜きます。「神の愛は無条件で、無差別であることを、この奇跡的瞬间に捉えられている間、私の心は完全に変化していた……。それまで私をいらいらさせ不快にさせた人たちのに親しい友人のように、憎めない」と。

第79話の中で、体の痛みベッドに横たわりながら「アフリカの国で自分の信念のために投獄され、六ヶ月完全な闇の中で過ごしたジョンのことをふと思い浮かべ、彼がどうやって苦しみを

を耐えることができたのだろう。どうやって思慮深く優しい人になれたのだろう。一見怒りもなく、笑いも楽しむ人」と思いつくらすのです。

第83話でトマトを見て、一つの疑いが浮かぶ。ある実は早く真っ赤に成熟し、あるものはやっつき、あとはまだ緑。どの実も同じ日差し、温度の中に育ったにもかかわらず……と自分の子どもの人生に思いを馳せます。

一つひとつの物語をすーっと読んでいた私は、ふと作者の奥深い、やわらかい心の琴線に触れ、読み直して味わい直したい気持ちに駆られたのでした。そして作者が神に出会い、動かされて「神体験」のさわりだけを感じ取っていた自分に気づかされたのでした。この本を再び手にして一つひとつの物語をじっくりと読み直し、黙想の材料にしたい強い望みが湧くのを感しました。わたしはまだまだ著者のように日常の出来事、出会い、小さな何でもない物象を通して神に触れる、開かれた柔軟な信仰を持ち合わせていませんが、この本を通して心の扉を叩かれ、読むごとに少しずつ、日常を通して神のメッセージを

聞き取れるようになったと感ずるようになりました。

そして、「著者アンシア・ダブ氏が、生を受けて八〇年の長きにわたって著作活動、平和運動、エキユメニズム運動に携わった中で培った鋭い洞察力。何よりもフェアであること、視線を対象に合わせることに印象的であり、深い悲しみにある時こそイエスの近くにいたいという思いが伝わってきます。そしていつ、いかなる時に神が手を差し伸べているのかを察知するために、魂はどうあるべきかを教えてくださっているように思います」という訳者、金成彰子氏のコメントに私は深く共感するのです。イギリス人作家のようにキリスト教文化に根差していない日本の文化の中で、信仰に生きる示唆を与えられたように感じます。

同時に私は訳者が敏感な心をもって、著者の思いを深く捉え、日本語という奥ゆかしい表現で伝えてくださっているのに感嘆しています。「霊的な生活に隠れた部分が不可欠であるとして」

それを捉える方法として「一人になることと貧しさです」とヘンリ・ナウエンの著書『今日のパン、明日の糧』から引用していることにも心打たれました。訳者の心構えに触れた気がする

とともに見習いたいと痛感しました。
(ひろと・なおえ＝聖公会会員)

(四六判・二四〇頁・本体二〇〇円＋税・聖公会出版)

聖公会出版

——新刊案内——

心をとめて 森を歩く

写真とては ●小西貴士

文 ●河邊貴子
森に心をとめてきた人(写真家 小西貴士)と子どもに心をとめてきた人(幼児教育研究者 河邊貴子)。ふたりが織りなす珠玉のフォト&エッセイ集。
自然のいとなみのなかに、小さな神さまの仕事を見つづけることができる大きな感動を秘めた小さな本。

新しい創造

著 ●太田道子

聖書を読むために 聖書を読むために
著者は聖書を読むための基本事項を分かりやすく説明し、神と人間の関係を明確にする。それはクリスチャンのみならず教会の外にも語りかけるものである。そして聖書を読むことは人が現実的に正面から向き合い、人間と社会を癒すための力となることを示す。多くの人が待望していた碩学太田道子の久々の著作。

現代思想における

イエス・キリスト

Jesus Christ in Modern Thought
著 ●サム・ハンフリー

訳 ●河野 隆
著者ジョン・マッコリー(1919-2007)は若年期にフルトマンを通してハイデガーの実存的哲学に大きな関心を持った。このマッコリーのキリスト論が本書である。キリスト論総論を学ぶための基本的な文献の翻訳として注目される。

〒162-0814 東京都新宿区新小川町9-1
☎03(3235)5681 FAX 03(3235)5682
http://seikokai-publishing.jimdo.com
nssk-bookshop@company.email.ne.jp

聖餐理解と実践、教会形成に関わる示唆を含む
ウィリアム・クロケット著
竹内謙太郎監修、後藤 務訳

ユーカリスト
新たな創造



越川弘英

本書は「ユーカリスト」、すなわち聖餐の意味と解釈に関する歴史の変遷を論じた専門性の高い研究書である。礼拝学や礼拝史に関心を寄せる人々にとっては掛け値なしに必須の参考文献であると云える。全体は七章から成る。「第一章 新約聖書におけるユーカリスト」は最後の晩餐の記述の分析を中心に、伝承が新約聖書の中で発展を遂げ様々な解釈が加えられていった経過を論じる。著者はユーカリストの理解をめぐる様々なテーマや課題の中から、とりわけ終末的観点の重要性をイエス自身の生涯に由来するものとして強調する。この観点はとりわけ本書の最終章できわめて重要なユーカリストの理解として再び取り上げられている。「第二章 初代教会におけるユーカリスト」(「初期教会におけるユーカリスト」と題すべきか?)は古代に生じたユーカリスト理解の変遷を辿る。聖餐の核心部分である「感謝聖別の祈り」の源泉がユダヤ教の食事の祈り、とりわけビルカット・ハ・マツオンにあることを論証し、それがデイダケー、ヒツポリュトス、そして古代の典礼系統の中でどのように変化していったかを分析する。この祈りの内容とな

るアナムネーシス、エピクレーシスの多様な展開を論じ、またこの時代に犠牲の概念が複雑な形で発達していく様子を跡づけている。この章の後半では教会教父たちの時代に生じた聖書の伝統とヘレニズムの世界観の葛藤と融合の中でユーカリストにおける象徴と実在の問題が取り上げられているが、これはユーカリスト全体の意味に関わる本質的な問題であると共に、とくに中世及び宗教改革の時代に「キリストは聖餐においてどのように臨在するか」という悩ましい問題を引き起こす端緒となつたものでもあった。「第三章 中世におけるユーカリスト」ではいわゆる実体変化の理念の展開とそこから生じた教会生活におけるユーカリストの位置づけの変化が描かれる。「第四章 ルターとツヴィングリ」「第五章 カルヴァン」「第六章 聖公会、ピューリタン、そしてメソジストの伝統」は宗教改革とそれ以降のプロテスタントにおけるユーカリストの神学の特徴と問題を論じている。一六世紀の改革者たちの聖餐論はわが国でも比較的多く紹介されてきたが、私が驚いたのは第六章で記されている一九世紀のオックスフォード・ムーブメントとユ

ーカリストの関係である。カトリック的伝統の復興をめざした聖公会内部のこの運動については高踏的で懐古的情緒的な印象が強かったのだが、本書によれば、受肉したキリストを真剣に受けとめるユーカリスト理解が、すべての被造世界と物質的現実に対する関心、社会的経済的変革を求める実践と結びついていったという。「彼らの地域教会で、正義はユーカリストからわき出で始めたのである」(三三〇頁)とあるが、こうしたユーカリストと社会正義をめぐるテーマは「第七章 現代の視点」においても大きく取り上げられている。この最終章では現代におけるユーカリストの象徴性の意義と重要性を哲学、社会学、神学など多様な側面から再検討し、ユーカリストが一定の意味を開示すると同時に献身と奉仕の行為へ導く媒体でもあることを明らかにする。解放の神学の視点なども交えて記されたこの章はとりわけ熟読すべき内容が凝縮されており、私たちの聖餐理解と実践、また教会形成に関わる多くの示唆を含んでいる。

る。実に広範な歴史的知識と煩雑な神学用語を必要とする本書をここまできちんと翻訳された訳者のお働きに感謝したい。ただし訳語の選択や統一など細部において気になるものが散見された。若干指摘しておく、「序」の1頁にある「世界キリスト教協議会」は「世界教会協議会」が正しい。二二頁以下に頻出する「ギリシア・ユダヤ」は「ヘレニスト・ユダヤ人」であろう。一三三頁の「言葉が要素になり、そしてそこにサクラメントがある」は「要素に言葉を加える、それがサクラメントとなる」の意味であろう。また本文中で書名をそのまま原語(英語)で記した箇所が頻出するが訳出すべきだと思う。

(四六判・四一七頁・本体四二〇〇円+税・聖公会出版)
(こしかわ・ひろひで)同志社大学キリスト教文化センター教員



新刊
死生学年報
2015

死後世界と死生観

東洋英和女学院大学
死生学研究所編
●A5判並製 本体2500円+税

死後世界の体感
北沢 裕

西洋中世美術にみる
天国と地獄の《音楽》
鈴木桂子

記憶される死者
忘却される死者
佐藤弘夫

カノボス容器にみる
古代エジプト人の死生観
大城道則

霊媒から腹話術師へ
高井啓介

「エサルハドン王位継承誓約
文書」にみる生と死
渡辺和子

身体の傷と心の傷
福田 周

石牟礼道子に見る
水俣病事件の「語り」と「運動」
宮嶋俊一

忘れて捨てて生きる
塩沼亮潤

他、7篇

LITHON [リトン]

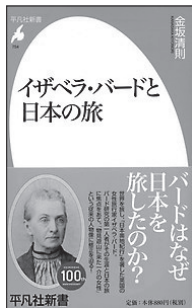
〒101-0061 千代田区三崎町2-9-5-402
FAX 03-3238-7638

明治期におけるキリスト教伝道の可能性を探求した
バードの研究成果

金坂清則著

イザベラ・バードと日本の旅

平凡社新書754



諫山禎一郎

金坂清則京都大学名誉教授とは、私は数年前からおつきあいがある。二〇一三年五月に東京大学駒場キャンパスで、「イザベラ・バードの旅と写真」講演会・写真展があり、出席した。この本は、彼女の著作『完訳 日本奥地紀行』（全四巻）、「イザベラ・バード極東の旅」（1と2・いずれも平凡社）などを訳されている金坂教授の研究成果といふべきものである。

バードとは、どんな人か。本書の巻末に略年譜があり、一八三二年（天保二）イングランド北部のヨークシャーのバラブリッジで生まれた。父は英国聖公会牧師で、一族にはカンタベリー大主教がいた。二十代の初めから旅行を始め、最初に英国国内を、次いでカナダ、アメリカ、オーストラリア、ニュージールランド、ハワイなどを旅し、一八七八年（明治一一）五月、横浜に上陸、東京に約五十日間、英国公使館に滞在、日光、新潟、秋田、大館、青森、函館、室蘭、平取、さらに神戸から京都、奈良、伊勢と丸七カ月間、国内を旅し、翌年広東、香港、サイゴン、マレーにも行った。一八八一年、四十九歳の時、十歳年下の医師ジョン・ビショップと結婚したが、五年後夫はカンヌ

で病没。その後病院で看護教育を学び、またロンドンで写真術を学んだ。一八九四年（明治二七）一月から極東の旅を始め、中国、朝鮮、日本を回り、九七年一月までかかった。その生涯に書籍十四冊、写真集二冊を出し、そのほか評論、ルポルタージュなど約百五十編の作品がある。一九〇三年八月に病で倒れ、翌年（明治三七）七十三歳で逝去した。

日本旅行には、前述の『完訳 日本奥地紀行』と『イザベラ・バード極東の旅』があり、後書の第一巻は左ページに写真右ページに説明を入れ、百二十枚の写真がある。写真は文章よりも理解しやすい。明治の昔に、このような写真使用を企画したことは、驚きである。旅の特徴は、英国公使館により特別の内地旅行免状があったこと、植物採集、通訳兼従者（伊藤鶴吉・日本の通訳ガイドの先達）を伴い、馬と人力車を使用、キリスト教伝道と普及の可能性の探求、慈善的社会活動、アイヌ特異性の調査などがある。それには、ハリー・パークス公使夫妻、公使館の日本語書記官アーネスト・サトウ（後の日本駐劄全権公使）などの支援、東京の日本聖公会ピカステス監督（今

の主教）夫妻をはじめ、新潟の宣教師ファイソン夫妻、函館の宣教師デニング、熊本的女性宣教師ハンナ・リデルなどイギリス・英国教会伝道協会（CMS）宣教師など教会関係者の援助もあった。またジェームス・ヘボン（ヘボン式ローマ字創設者、医師）、同志社の新島襄夫妻などが支援した。

麻布区采町（今の港区芝公園）の聖アンデレ教会隣接のピカステス館（写真あり、後に焼失）で、ピカステス夫妻のもてなしを喜んだ。麻布区永坂町にあった聖ヒルダ会孤児院に和風寄宿舎を寄贈した。これは、濃尾地震の被災孤児たちを東京に移住させたもので、この建物と孤児たちの写真がある。この撮影については、バードの携帯した三脚付きの写真機（約九キロ）と彼女の姿がある写真があり、身長一五〇センチ位の小柄な彼女と並ぶような三脚が目立つ。当時はガラス板状の大きなフィルムを使っており、携行するのも大変だったと思う。

この孤児院のことを当時の聖公会機関誌の一つ「日曜叢誌」

第七十一号、明治二十八年十月一日発行に「ジョン・ビショップ孤児院」という記事を見つけた。それは、バードが亡夫・ジョン・ビショップを記念して、麻布区永坂町一番地の孤児院のために、一棟の寄宿舎を建設するように、寄付をして、ジョン・ビショップ館と名付け、九月廿八日に、監督ピカステス師司式にて開院式を挙行したとある。なお、この孤児院は一九一〇年（明治四三）火災により焼失し、その後麻布区白金三光町に移転し、聖ヒルダ揺光ホームと改称されたと記録にある。また、バードと孤児院についての研究論文には、愛知県立大学中西良雄教授「聖ヒルダ・ミッシェンの慈善事業（2）——濃尾震災救援と孤児院事業」（人間発達学研究第3号所載）がある。

（いさやま・ていいちろう）日本聖公会文書保管委員
（新書判・二七二頁・本体八八〇円＋税・平凡社）

キリスト新聞社の本
Kirisuto Shimbun, Co., Ltd.



好評発売中!

宣教における連帯と対話

関西学院大学神学部
ブックレット①

関西学院大学神学部設立125周年記念 第48回神学セミナー
二〇四年一月に行われた第48回関西学院大学神学部神学セミナーの講演と礼拝を収録。今回の神学セミナーは、特に神学部設立125周年記念行事の環としてグローバルな広がりて今日の宣教伝道について考察。

A5判 150頁 1500円

大切な人へのプレゼントに！ 天路歷程 天の都を目ざして

ジョン・バンニヤン 作
メアリー・ゴドルフ・フレイ 再話
ロバート・ローソン 画

聖書に次ぎ、世界で最も多く読まれてる旅物語。世界中で読まれてきた不朽の名作「天路歷程」がさらに読みやすくなりました！



B5判 116頁 1500円

キリスト新聞社
351-0114 埼玉県和光市本町 15-51
和光プラザ2階
TEL. 048-424-2067 (通話料は別) (郵送料は別)
E-Mail. support@kirishin.com
URL. http://www.kirishin.com

■新教出版社

僕はルハマを選んだ

愛と召命の狭間の神父(仮題)

アルベルト・クティエ著、八重樫克彦／八重樫由貴子訳
キユーバ亡命者の両親のもとフロリダで育ち、聖職を志してヒスパニック系住民への司牧に献身する神父が、愛する人と出会い、多くの軋轢を経つつ、なお教会への召命に忠実であるとする歩み。
四六判・328頁・予価2500円

■日本キリスト教団出版局

手話で歌おう!

おとなも子どもも一緒にさんび

原崎悦子手話指導、石橋えり子イラスト

『子どもさんびか改訂版』と『讚美歌21』に共通の賛美歌を中心に、アドベントから昇天日までの教会暦や神さまの愛を生き生きたと伝える18曲を収録。「すくい」「ゆるし」「れいはい」「いのり」など、キリスト教用語のわかりやすい手話図説も取められている。 B5判・40頁・本体1000円

旧約聖書神学用語辞典 響き合う信仰

W・ブルツゲマン著、小友聡／左近豊監訳

愛、贖い、アシエラ、アツシリア、荒れ野、安息日……。旧約神学の最重要105項目を、北米を代表する旧約学者が厳選して解説。項目と項目が響き合い、旧約神学とは何か、その奥深さとダイナミズムが迫ってくる。新約への結びつき、現代的意味の解明もたいへん興味深い。
A5判・530頁・本体6200円

ひかりをかかげて

永井隆 原爆の荒野から世界に「平和を」

片山はるひ著

放射線医であった永井は2度の従軍を経験、レントゲン被曝のために白血病となり、余命3年を宣告される。長崎への原爆投下で妻を喪い、自ら重傷を負いながらも、被爆者の救護に励む。一貫して訴えられるのは、戦争の愚かさ、原爆の悲惨さ、平和への願いである。
A5判・130頁・本体1200円

天国での再会

日本におけるキリスト教葬儀式文のインカルチュレーション

中道基夫著

愛する者の葬りに対する日本人の精神性とキリスト教の信仰とは対立する

INFORMATION

近刊情報

ものなのか。インカルチュレーション(文化内開花)という視点から、日本の死者儀礼を歴史的に振り返りつつ葬儀式文・賛美歌を検証し、現代日本の教会がどのように向き合うのかを問う。
A5判・266頁・本体3600円

希望に照らされて 深き淵より

2014年上智大学神学部夏期神学講習会講演集

宮本久雄／武田なほみ 編著

人間相互間の関係性の破綻が叫ばれ、科学技術の安全神話の崩壊を知らしめた原発の事故を経験したいま、私たちは一体何に「希望」を置くことができるのだろうか。聖書や思想に基盤をおきつつ、医療や文学から「希望」というテーマに挑む。第一線の探究が結集した1冊。
四六判・290頁・本体2800円

自死遺族支援と自殺予防

キリスト教の視点から

平山正実／斎藤友紀雄 監修

年間25000人近くが自死する日本社会にあって、教会、信徒はどのように自死に向き合うべきか。本書は自死遺族支援、自殺予防をテーマに展開。遺族、自殺未遂体験者の手記、支援者や専門家からの提言を収録。「自死」を通して生きることをあらためて考える。
四六判・240頁・本体1800円

■教文館

日本の伝道を考える2 和解の福音

上田光正著

伝道の神学的根拠はどこにあるのか? バルトが「福音のスナマ(総括)」と呼んだ「神の恵みの選び」に立脚しながら、十字架と復活の福音を語る教会のあり方を問う。
A5判・208頁・本体1500円

C・S・ルイスの生涯

A・E・マクグラス著／佐柳文男訳

多くの読者を魅了する『ナルニア国物語』を生み出したルイス。キリスト教護教家、文学者、そして信仰者としてキリスト教の本質を見つめたその人生を辿る。
A5判・550頁・本体4900円

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jp-shop.com	sasaki@jp-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用	http://www7.ocn.ne.jp/~zen-book/	zenrinkan_syoten@yahoo.co.jp	02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台市青葉区1-36 敷島センター・1771F	022-223-2736	共用		fqcwk524@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中央区稲32 2 様カリスチャンセンタービル	043-238-1224	043-247-3072		keisen@vesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
聖公書店	162-0814	東京都新宿区新小川町9-1	03-3235-5681	03-3235-5682	http://seikokai-publishing.jimdo.com	nsk-bookshop@company.email.ne.jp	00140-8-50880
アバコ・ブックセンター	169-0051	東京都新宿区西早稲田2-3-18	03-3203-4121	03-3203-4186	http://www.avaco.info	avaco@avaco.info	00130-0-96398
待農堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	03-3333-6378	http://members3.com.home.ne.jp/taishindo/	taishindo@icom.home.ne.jp	00110-8-95827
キリスト教書店ハンナ	162-0814	東京都新宿区新小川町9-1	03-3269-4490	03-3269-4491		krisutokyoushoten@anna@ybb.ne.jp	00150-9-595509
バイブルハウス南青山	107-0062	東京都港区南青山5-10-2	03-6418-5230	03-6418-5231		biblehouse@bible.or.jp	00250-4-2512
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www7.biglobe.ne.jp/~yokohama_cbs/index.html	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00540-6-82826
清光書店	951-8114	新潟市営所通 一番町313	025-229-0656	共用			00540-6-82826
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612		info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋市千種区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://homepages3.nifty.com/seibunsho/	nagoya-seibunsho@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834		kjorden@mbx.kyoto-net.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0002	大阪市北区曽根崎新地2-1-15	06-6345-2928	06-6345-2187	http://osakacbs.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
堺キリスト教書店	591-8044	堺市北区中長尾町2-1-18	072-257-0909	072-253-6132		sakai-x@topaz.plala.or.jp	00960-9-47426
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18 三宮ビル2F	078-331-7569	078-331-9833			01150-7-45120
広島聖文舎	730-0016	広島市中区鞆町7-28	082-228-4914	082-223-0951			01360-4-1958
徳島キリスト教書店	770-0052	徳島市中島田町3-57-1	088-633-6335	共用	http://www6.ocn.ne.jp/~tcs/	tokushoten@shirt.ocn.ne.jp	01630-5-37119
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一万町1-23	089-921-5519	089-921-5413		sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
北九州キリスト教ブックセンター	802-0022	北九州小倉北区上雷野5-2-18	093-967-0321	共用	http://kcbook.net/	kcbookcenter@ybb.ne.jp	01780-4-39965
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484			01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用			017304-45044
沖縄キリスト教書店	901-2131	浦添市牧港1-60-6	098-877-7283	共用	http://www.okinawacbs.com/	okinawacbs@yahoo.co.jp	020308-1283

※一般書店関係の方は 日キ販営業部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

新教出版社

福音と世界

2015年5月号

特集 教会と憲法、人権と平和

改憲に前のめりの政治状況の中で、改めて憲法の意味を問い、信仰から捉え直す。

寄稿者 遠藤比呂通、関田寛雄、河野克也、

オラフ・トヴェイト、鈴木伶子

新連載

レイナスの時間論2………内田 樹
キリスト教美術案内2………八木美穂子

好評連載

望月麻生、高橋優子、一色哲、木原葉子、佐藤優、青野太潮、月本昭男、沢知恵

A5判・本体588円・〒70円

定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

ラディカル・ラブ

パトリック・S・チエン著／工藤万里江訳

クエア神学入門

神学の新しい形

あらゆる境界を打ち破る「過激な愛」としての神に関する、刺激に満ちた三一論的神学の試み。

A5判・2300円



〒162-0814 東京都新宿区新小川町9-1

TEL : 03-3260-6148

Email: sales@shinkyoy-pb.com

編集室から

日本のカトリック教会にとって今年は二つのことにおいて記念すべき年である。二月五日にクリシタン大名の高山右近没後四〇〇年を迎え、三月一七日には「日本の信徒発見」一五〇年を記念するミサが長崎の浦上天主堂で執り行われた。

浅学非才な私でも「高山右近」という名前には聞き覚えがあるが、知っていることと言えば、彼がキリスト教に入信したクリシタン大名であり、江戸時代に幕府から出された禁教令によって国外に追放され、そのまま海外で亡くなった、といったことぐらいである。

実際にはどんな人物だったのだろうか？ そんなことを考えていたら、本誌(四―五頁)で紹介されている黒川知文著『日本史におけるキリスト教宣教―宣教活動と人物を中心に』の八―一八六頁に「宣教にささげた人」として高山右近のことが取り上げられていた。詳しいことは同書に譲るとして、私が改

めて心に留めたのは彼がキリスト教の信者になったのは、たゞ物珍しい西洋の文物に対する憧れや南蛮貿易で利益を得ようとしたためでは決してなく、本当にキリスト教の教えを真理として受け入れた、ということである。没後四〇〇年を迎えた今年、高山右近はカトリックで「聖人」に次ぐ崇敬の対象である「福者」認定の期待が高まっている。

「日本の信徒発見」は、江戸幕府の厳しい弾圧の中で二百数十年間も信仰を守り続けた浦上のクリシタンがパリ外国宣教会の二代目日本教区長のプティジャン神父に自分たちの信仰を打ち明けたことがきっかけであった。

幸いなことに今の日本は江戸時代と違って「思想」「良心」「宗教」の自由が憲法で保障されている。一人の殉教者も出さない社会がこれから未来永劫続くように日本国憲法の問題が受け継がれていくことを切に願う。

(中川)

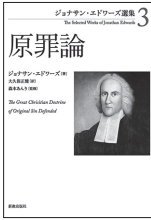


市民K、教会を出る

話題沸騰

韓国プロテスタントの成功と失敗、欲望の社会学
金鎮虎著／香山洋人訳 韓国キリスト教会の今！
話題騒然となった自己省察の書。韓国の戦後社会にとってプロ
テスタンティズムとは何だったか。今後どこに向かうのか。韓
国現代史を通して徹底検証。

◆A5変・本体2400円

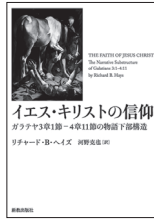


原罪論

ジョナサン・エドワーズ選集3

本邦初となる選集全7巻の第1回配本。人間理性への楽観主義を戒め、救いの唯一の源たる恩寵を擁護した晩年の主著。「アメリカ最初の神学者」とも呼ばれる18世紀の会衆派牧師エドワーズは、独創的な著述によって巨大な影響を残した。アメリカ精神の源流を理解するためにも必読の文獻。

◆A5判・本体7000円



イエス・キリストの信仰

ガラテヤ3・1-4・11の物語下部構造

リチャード・ヘイズ著／河野克也訳

人が救われるのはイエス・キリストへの信仰によるのか、それともイエス・キリストが信ずる信仰によるのか？パウロの「ピステイス・イエス・クリストウ」は主格的属格なのか対格的属格なのか。長きに渡る論争に鮮やかな解決を提示した古典的論文の待望の邦訳。著者は4月来日。

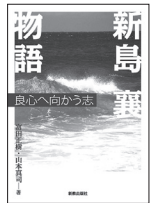
◆A5判・本体6500円

新島襄物語 良心に向かう志

富田正樹・山本真司著

中学・高校生たちのために書き下ろされた「新島襄入門」。襄が何を願い、いかなる志をもって生きたかを、近代史を背景に、豊富な図版と平易な文章で解き明かす。オールカラー。

◆A5判・本体1200円



パパやママががんになったら

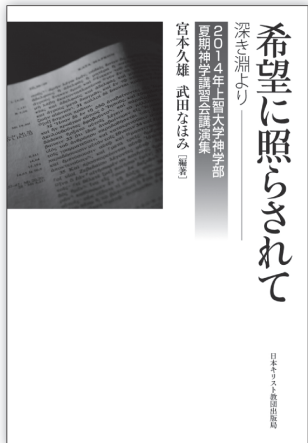
藤井あけみ著

チャイルド・ライフの出会いから

難病と闘う子どもの心のケアを専門とするチャイルド・ライフ・スペシャリストが、親が難病を抱えたときの子どもの接し方、また家族のあり方を、現場での出会いを通じて温かな視線から考える。

◆B6変型・本体1500円

一九五七年七月一七日 第三種郵便物認可
 二〇一五年五月一日発行(毎月一回一日発行)
 発行所 東京都新宿区新小川町九一ー一 一般財団法人キリスト教文書センター
 〒169-0834 電話〇三―三三六〇―一六五二〇 振替〇〇一―七〇一―一六七九
 発行人 本村利春 編集人 中川忠 印刷所 横平河工業社
 日本キリスト教書販売株式会社 電話〇三―三三六〇―一五六七〇
 定価七八円(税抜七二円)(72円) 一年分一三〇〇円(送料共)



希望に照らされて 深き淵より

2014年上智大学神学部
夏期神学講習会講演集

宮本久雄／武田なほみ 編著

執筆陣 月本昭男／島蘭 進／黒鳥偉作／光延一郎
 中川博道／竹内修一／佐藤真基子／ホアン・アイダル
 川中 仁／高山貞美／森 裕子

私たちは一体何に「希望」を置くことができるだろうか。
 聖書や思想に基盤をおきつつ、医療や文学から「希望」
 というテーマに挑む。第一線の探究が結集した1冊。

◆四六判 並製・290頁・3,024円

みんなで楽しく表現力豊かに賛美をささげよう

手話で歌おう！ おとなも子どもも一緒にさんび

原崎悦子 手話指導 石橋えり子 イラスト

『子どもさんびか改訂版』と『讚美歌21』に共通の賛美歌を中心に、
 アドベントから昇天日までの教会暦や神さまの愛を生き生きと伝える18曲を取録。
 ◆B5判 並製・40頁・1,080円



電子書籍のご案内



◆本体価格300円

聖書日課『日毎の糧2015』 電子書籍版好評配信中!

日々の祈りに便利にご利用いただけます

詳しくは下記アドレスをご覧ください

<http://bp-uccj.jp/publications/higoto2015/>

amazon kindleでも配信を開始しました